



第1回ブランチ賞は松橋順子さんに

ことしから設けられた東京ブランチ賞、その第1回は松橋順子さんに贈られます。ソサエティから賞状を入手次第、順子さんにお手渡しすることになりました。

松橋順子さんは1963年の池間博之先生の帰国後、ただちにスコティッシュ・カントリー・ダンシングの普及に共鳴され、「東京スコットランドダンスを楽しむ会」の中核メンバーの1人として活躍する一方、日本フォークダンス連盟の有力会員の1人として同連盟を通じて日本のフォークダンサーにSCDの楽しさを伝えてゆきました。

旧浦和市にダンシング・グループを作り、1982年にティーチャー資格を取得されると池間先生および岡田昌子さんらとともに東京ブランチの設立に積極的にかかわりました。その後もチェアマンをはじめ三役、運営委員を歴任し、ブランチ発展につとめられたのです。2001年の埼玉ブランチ創立にも発起人の1人として大きく貢献しました。

SCD普及のために日本にもっと公認ティーチャーを、の信念を貫き、順子さんの指導、激励をうけて多くのティーチャーが誕生したことは、ブランチ会員のよく知るところです。さらに2003年4月の試験においては予備試験受験のチューターをつとめ、受験生の熱意をまとめあげて10人全員の合格を果たし、本部における東京ブランチの名を高らしめました。

順子さんはサマースクールには毎年参加し、セント・アンドルーズで日本をアピールするとともに数多くの友人を得ました。ブランチが堅実な歩みを遂げているのは、順子さんから端を発した海外の友人からの情報、助言によるところが大きいといえます。

順子さんのおだやかで大きな包容力は多くの人を魅了し続けています。順子さんは昨年秋に病を得られましたが、ブランチ賞をバネに気力、体力をさらに充実したのち、みなさんの前に元気な姿を再び現すことができるよう、加療を続けておられます■

東京ブランチ・クラス

(会場はそのつど変わります。毎月のクラス案内をご参照、または担当にお問合わせください)

ビギナーズ・クラス

10月でひと区切りとなり、11月から半年間、あらたなクラスをひらきます。

11月8日(月)・22日(月) 1.30-4.30

12月13日(月)・27日(月) 1.30-4.30

以降毎月第2・第4月曜日

講師 神倉那智子・佐藤仁美

¥600

担当 兼松千奈美 03-3752-6374

ステップ・ダンス・クラス

11月13日(土) 1.15-2.05 講師 櫻井香枝

幡ヶ谷社会教育館(予定) ¥300

以降毎月第2土曜日

担当 吉江紀美 043-237-4715

インターミディエイト・クラス(土曜クラス)

11月13日(土) 2.15-4.30 講師 増田静子

12月11日(土) 2.15-4.30 トム鳥山

1月8日(土) 2.15-4.30 若松陽子

2月12日(土) 2.15-4.30 鈴木百代

幡ヶ谷社会教育館(予定) ¥600

担当 吉江紀美 043-237-4715

インターミディエイト・クラス(月曜クラス)

11月1日(月) 1.30-4.30 講師 近藤幸子

12月6日(月) 1.30-4.30 長峯真弓

1月 休み

2月7日(月) 1.30-4.30 大井富佐子

¥600

担当 境 雅子 047-368-3873

アドバンスド・クラス

11月6日(土) 6.20-8.45 講師 境 雅子

12月4日(土) 6.20-8.45 林 浩子

1月 休み

2月5日(土) 6.20-8.45 トム鳥山

¥600

担当 大井富佐子 03-3330-4676■

池間先生 RSCDS 功労賞受賞 祝賀ダンス会

9月にチラシでお知らせしましたが、池間先生の受賞を記念し、お祝いするため、つぎのとおり祝賀ダンス会を開催いたします。皆さんの大きな盛り上がりをご期待しています。

11月3日(水・祝) 11-4.30

ホテルはあといん乃木坂・フルールホール

(東京メロ・乃木坂駅直結)

会費 ¥10,000 (昼食含む)

定員 100名 (先着順受付)

ミュージシャン 小海弘子・菊池孝・

太森ヒデノリ

締切り間近です。郵便振替 00160-9- 64023

「RSCDS 東京ランチ」で至急お申込みください



千代田区で施設改修工事

ランチのビギナーズ、月曜インターミディエイト、およびアドバンスド・クラスは東京・千代田区の施設を利用し、これが定着しています。11月から2005年1月までの予定で順番に各施設の改修工事が行なわれ、この間利用不可となります。委員会は、会員のつてを頼って代わりの会場を懸命に探しています。

会場が遠くなったり、ことによるとクラス中止のやむなきにいたることがあるかもしれませんが、しばらくのご辛抱をお願いします■

RSCDS 東京支部

チェアマン 五十嵐成子

T/F 048-445-1527

セクレタリ 中田多鶴子 T/F 0297-64-9486

〒301-0855 龍ヶ崎市藤ヶ丘 5-7-5

Email: wbnsd292@ybb.ne.jp

トレジャラ 松村 茂 T/F 047-371-9054

委員会メンバー 大井富佐子 03-3330-4676

兼松千奈美 03-3752-6374

境 雅子 047-368-3873

トム鳥山 044-988-7773

吉江紀美 043-237-4715

ホームページ www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/

同担当 吉澤敦子 T/F 0298-41-0767■

Book 45 用ダンスの評価

- 9月26日ティーチャーズ・ミーティングで -

2005年に発表される Book 45 のダンスについて、2003年の Book 44 と同じように当ランチにも本部から予備評価依頼がありました。グループ D の6ダンスのランク付けです。言うまでもなく当ランチが提出した“Snow Drops in a Storm” (稲垣俊・作、村上美枝子・作曲、ランチレター No.60 参照) はグループ D に含まれておりません。委員会は、9月26日(日)赤羽台東小で行なわれるティーチャーズ・ミーティングの機会に候補6ダンスを踊り、出席者に等級付けを行なってもらい、本部に回答することとしました。非出席者からは等級付け結果を送付していただくことにしています■

のしろウィンズで Book 44 講習会

年次総会で討議された首都圏外への講師派遣は、のしろウィンズの依頼により、10月19日(火)能代市で Book 44 ダンス講習を行ないます(講師:トム鳥山)。のしろウィンズに限らず、近隣の多くのダンサーの出席が望まれます。

東京から主要駅までの交通費をランチが負担し(上限あり)、以後の交通費・謝礼・雑費は地元負担という方式はこれが初回です。講師派遣を希望されるグループはセクレタリまでお問合わせください■

RSCDS ウィンタースクール

2005年2月24日(木) - 3月1日(火)

アソル・パレス・ホテル

£308(2人部屋)

締切り 10月17日(日)

インターミディエイト、アドバンスド、ベリニア

ドバンスド/ティーチャーズの3クラス

申込用紙はセクレタリにお問合わせください■

- 訂正 -

年会報をつぎのとおり訂正します。

p.28 湘南スコティッシュダンスクラブおよび
大和スコティッシュカントリーダンスクラブの住所:

藤沢市湘南台 2-28-1

p.31 柏スコティッシュカントリーダンスサークル連絡先:

坂井雅子 T&F 04-7192-1207

〒277-0902 沼南町大井 1835-19-105

誤記をおわびします。

運営委員会報告

6月9日

- (1) 三役および支部各担当(クラス、ショップなど)を決定した。
- (2) クラス参加費額を¥600 に減額決定。
- (3) Book 44 Dances 講習会の場所と日取りを検討し、昨年どおり2箇所実施をきめる。
- (4) 月曜インターミディエイト・クラスの9月からの実施をきめる。
- (5) 9月以降のクラス講師についてはアンケートを求め、その結果によることをきめる。

7月3日

- (1) 池間先生祝賀会の基本事項をきめる。
- (2) ブランチレター編集担当をきめる。
- (3) マニュアル日本語版発行の取り組みについて討議。3ブランチ合同の打合せ開催の音頭をとることをきめる。
- (4) Book 44 Dances 講習会・赤羽台東小がとれたので会費、委嘱ピアニストなどをきめる。川崎市における会場がとれなかったため、日野市をあたることとした。
- (5) 9月以降のクラス講師についてはアンケート結果を得て12月までを内定し、講師の了解をとることにした。
- (6) 本部からBook 45 候補ダンスの評価依頼あり、次回委員会で討議することとした。
- (7) 東京ブランチ賞授与について意見を持ち寄ることにした。

8月7日

- (1) Book 44 Dances 講習会・赤羽台東小の講師を内定し、詳細をつめる。日野市の会場がとれたのでこちらも具体化を進める。
- (2) Book 45 候補ダンスの評価方法について討議。9月のティーチャーズ・ミーティングで評価を行なうことにした。
- (3) 池間先生祝賀会は会場側との調整結果を討議し、支出が予算をやや上回るがこれを了承した。ミュージシャン候補、ダンスの内容(池間先生希望を取り込む)を内定。
- (4) International Weekendについて会場側との調整結果を討議し、さらなる商議(価格交渉)推進を確認した。海外からの送金受け口として銀行口座開設をきめる(いままでは郵便貯金口座のみ)。
- (5) 鳥山からサマースクール第1週の参加報告。日本からの参加者は例年になく多数。

9月4日

- (1) Book 44 Dances 講習会・赤羽台東小の反省・評価を行なった。
- (2) 同・日野会場の実施要領をきめる。
- (3) 池間先生祝賀会の詳細を内定。MC 候補、スピーチ依頼などで了解を得ることにした。
- (4) 第1回東京ブランチ賞について選考基準その他を討議し、受賞者をきめる。

ケン&ノコ春日夫妻合格!

- サマースクール2004 予備試験 -

80人に近い日本人が参加したサマースクール2004において、ケン&ノコ春日さん夫妻が予備試験に合格しました。おめでとうございます。ケン春日さんのレポートは9ページをご覧ください。

サマースクール2005

来年のセント・アンドルーズはゴルフ・オープン選手権 The Open (ゴルフ発祥国のプライドから、The British Openと言わない。英国切手に国名表示がないのと同じ)のため、サマースクールは1日遅れて開催されます。

7月18日(月)-24日(日) 7日間

7月24日(日)-31日(日) 8日間

7月31日(日)-8月7日(日) 8日間

8月7日(日)-14日(日) 8日間

第1週に参加する人はその分、参加費減額があります。

- (5) 1月 - 4月までのクラス講師についてはさきのアンケート結果にもとづいて内定し、講師の了解をとることにした。
- (6) International Weekendの時間割について、会場側とのさらなる調整を行なう。サマースクールに宣伝用のチラシをおいたが、持ち帰る人はあまりいなかった。
- (7) 次回試験の実施時期、日本語版マニュアル作成について、9月8日、3ブランチ合同の打合せを行なう。
- (8) のしろウィンズからの依頼を受け、派遣講師をきめた。

これからの委員会日程

10月2日(土)

11月6日(土)

12月4日(土)

ご意見ご感想など、委員会は大歓迎しています。各委員にどしどしお寄せください■

月曜インターミディエイト・クラス開始

ビギナーズ・クラスを経験し、さらにスタンダードを向上させたいが、月曜しか家を留守にできないという会員のために、9月6日から千代田区総合体育館でインターミディエイト・クラスを開始しました。

初回はなんと41名もの参加で、クラスどころではなかった状態でした。様子を見ながら、広い会場に移ることを検討中です■

ドイツに新ランチ

旧西ドイツ時代からドイツでは日本以上にスコティッシュ・カントリー・ダンシングがさかんであったがランチは皆無で、不可解な事象のひとつであった。

このほどフランクフルト・グループ（40年の歴史あり）が中核となってようやくランチが誕生した。当ランチからもお祝いのカードを送った。（返信はまだない）。名前はセントラル・ジャーマニー・ランチ。

The Central Germany Branch
Chairman Carola Fischer
Secretary Martina Mueller-Franz,
St Martinushof 3,
Langenfeld, D-40764, Germany ■

Book 45 用に 30 のダンス提出あり

- 本部理事会報告 -
(本部議事録 2004.6.18 から抜粋)

6月12日の本部理事会の内容は、

- *本部事務室の改修が終わり、会議室2室となった。トイレも改善され、キッチンも階下に設けた。
- *本部直接会員一近くにランチがなかったり、転勤の連続でランチ会員になることができない人が直接会員になっている。そういった人のために「国際会員ランチ」を設けることで賛成を得た。
- *本部会費見直し一家族で会員になっている人、25歳以下の人の会費額を検討する。
- * Friends of the RSCDS一クラスに参加できなくなったが、ソサエティとのつながりを保ちたいという元ダンサーが対象。どのような組織にするか、具体案を作ってゆく。

総務・財政委員会

- *ジーン・マーティンから4月に実施した本部スタッフの勤務評定報告あり。給料と年次休暇日数に関する委員会案を了承した。

会員サービス委員会

- *Book 45 には、各ランチから提出された計30ダンスから10ダンスを選定する。
- *マニュアル改訂版は印刷直前状態にあり、11月のAGMには刊行される見込み。
- *CD録音時、キーを変更する場合は理由付けをきちんとしておくよう、バンドに求める。
- *バンドが（ボールなどで）指定曲と異なる曲を演奏することがある。現場責任者は事前にバンドとこの件をよく調整すること。
- *新マガジンのコーディネータにジミー・ヒルを選任した。
- *MC用ガイドラインを討議。ピーター・クラークが原案を作成することになった。

教育訓練委員会

- *新試験制度（案）について100をこえる建設的意見が寄せられた。原案に取り込み、9月の理事会に提案したい。

英国ティーチャーズ協会

- *2004年の年次総会のオープン討議で意見を求める。

その他

- *残念ながら、Whitehead Branch（北アイルランド）が解散した■

アリス・マーフィ Alice Murphy

おもにサマースクール前期2週間のティーチャーとして活躍していたアリスが8月18日に亡くなった。ことし初めに体調を崩し、サマースクール第2週にご主人のジョー・マーフィに付き添われて3日間ほどニューホールに滞在して参加者と旧交をあたためていた。その様子から、このような知らせがあるとはとても信じられないんだ、とピーター・クラークは言っている。

おかつば頭で、めがねの奥にクリクリとしたひとみがあり、常にフレンドリーだった。ジョーとともに、ことに日本人に親切に接してくれた。

昨年ティーチャーズ・クラスではBook 44ダンスを担当し、ひととおりの指導したあと「さあ、ティーチング・ポイントをメモして！」のことばが思い出される。ずっと活躍してほしかった人で、惜しまれてならない。(Tom)

ジム・マクラウド Jim MacLeod

ピアニストのジム・マクラウドが5月に76歳で亡くなった。ジムとかれのスコティッシュ・バンドは50年以上にわたり数え切れないほどラジオ、テレビに出演し、バルモラル宮でも演奏した。

1960-70年代はロンドンで活躍し、ロンドン支部の常連バンドでもあった。LPやビデオも多数残している。RSCDS Book 35 (1988)音楽はかれの演奏である。

ブルース・フォーダイス Bruce Fordyce (1925-2004)

ブルース・フォーダイスといっても日本のダンサーにはピンとくる名前ではないが、Seton's Ceilidh Bandを作った人と言えば、はほんとうなずかれるだろう。指定曲もかれの作曲である。

ブルースはニュージーランドの人。1953年にホークス・ベイ（ウエリントン）でダンス・クラブを作り、このグループが中核となつてのちのNZ SCD協会、ついでRSCDS NZランチに発展した。第1回NZサマースクール(1954)の実行委員でもあった。かれの葬儀には、遺志にもとづいてピーター・エルムズ、ジョン・スミス、リン・スコット（いずれもNZを代表するミュージシャン）の演奏でホークス・ベイのダンサーがSeton's Ceilidh Bandを踊った■

次回試験は 2006 年を希望

- 3 ブランチ合同打合せ -

今回の日本における資格試験およびマニュアル日本語版発行の取り組みについて、東海、埼玉、当ブランチによるサミット・ミーティングが9月8日に行なわれ、つぎのとおり意見の一致をみました。

1. 次回資格試験は、2006年春以降の実施を本部に申し入れる。

- (1) 本部における2005年のエギザミナー派遣計画が定まっておらず、いつ計画が発表されるかも不明である。
- (2) 2005年春の試験は、3ブランチとも準備期間が不足し、いまとなっては実施困難である。
- (3) 2005年秋の実施も考えられるが、この時期になると新試験制度が適用され、日本はその初期段階となることが予想される。新試験制度の概念がまだ浸透しないまま試験実施されると、受験生に不利な結果をまねく恐れがある。
- (4) 準備期間と新試験制度浸透の兼ね合いから、2006年春以降の実施が望ましい。

2. マニュアル日本語版発行は、ことし11月に刊行が予想されている、A4サイズ改訂マニュアルの入手後に取り組む。日本側の基本姿勢は、

- (1) 「原文著作権使用料は無料、日本語版著作権の帰属は日本、印刷製本は日本、完成品の保管は日本で」を、その時期となったら本部に申し入れる。
- (2) 翻訳する範囲は、現行マニュアルの Chapter 1 - 4 および Chapter 8 に相当する部分とし、Chapter 5 - Steps、Chapter 6 - Formations および Chapter 7 - Notes for Dances は邦訳しない。
- (3) 各ブランチから2名程度の翻訳者を選出して翻訳チームを作り、作業を進める。翻訳チームの実務を円滑に進めるため、付随する事務局が必要となろう。
- (4) 翻訳完成稿を本部に送り、本部監修を経たのちに印刷、の手順となろう■

最近のヤンガーホールで思うこと

(ビル・ダン、イングランド・サリー県)

やあトム、元気だと思う。こっちは相変わらずだ。いつか言ったけど、英国で季節は二つしかない。短い夏と長い冬だ。ことし、夏らしい日はあまりなかったよ。9月、もう冬だ。

スケジュールが合わなくて、きみはセント・アンドルーズ第1週、ぼくとイザベルは第4週だった。来年は一緒になりたいね。“The Sunday Post”紙に載ったきみの写真で、きみもやっちょるわいと思った。

最近のヤンガーホールはもう混雑していて、ますますひどくなってきた。踊っていてもあまり楽しくないよ。前から混み合っていたが、なんとか秩序は保たれていた。ぼくら夫婦が始めてヤンガーホールで踊ったのは5年ほど前だったが、自信のないダンスにはフロアに出なかったものだ。いまはどんなダンスだろうと、誰でもかれでも出てゆく。

スコティッシュ・ダンシングはフレージングやチームワークを重んじるから、村の祭りのダンスのように見よう見まねでは踊れない。なのに、まるでわからない同士がカップルでセットに入り、セットを無茶苦茶にしている。初心者のぼくらは自信のある数ダンスしか踊らなかつた。どのプログラムにも、なじみのダンスが5ないし6ダンスはある。それ以外のダンスは経験者に誘われないう限り、座って見ていたものだ。

セットに初心者が1人くらいなら、他のダンサーが中級程度でもなんとかセットが保てる。2人になると、パートナーがかなりの経験者でないとセット維持はむずかしい。これはぼくらの経験だ。したがって、まったくダンスを知らないもの同士がカップルで入ってくると、もうお手上げになる。

むかし、経験者によく言われた。ダンサーはコンピュータじゃないから、間違えるのはしかたがない、ただすぐ修正できること、いるべき場所にすぐ戻れること、クラスでないのだから、ダンス会を楽しもうと来ている人に申し訳ないでしょう、と。

カップルでホールに来て、初めから終わりまでパートナーを変えないのもいる。なにを考えているんだ、と思う。ぼくらは夫婦で参加しても、イザベルと踊るのは1ダンスか2ダンスだ。ホールは社交（見知らぬもの同士がダンシングで友人になること）の場なのだから、できるだけ多くの人と踊るのが礼儀だよ。それに1人で参加している人に失礼だ。RSCDSの歴史を描いたビデオで、初期の隆盛はパートナーなしで来てつまらない思いをすることがなかったから、というのがあったよね。

ダンス予約だって感心しない。ホールに入るや、次々にプログラムにパートナーの名前を記入している人を見かける。知らないもの同士が、年齢、経験、階級、国籍に関係なくダンスを楽しむのがSCDだろう？もっと偶然性を大事にすべきだよ。それにヤンガーホールのあの混雑の中、つぎのパートナーがどこにいるのか、ちゃんとわかっているのかねえ。

まあとりとめのないことを書いたが、きみが第1週のヤンガーホール・ダンスをどう感じたか、そのうち聞かせてくれ。ではまた■

スコティッシュ・カントリー・ダンシング は楽しみ？命にかかわる？

(メル・ブリスコー、米国バージニア州)

2年前、スキューバ・ダイビング教師教室に通ったことがある。プロ・ダイビング・インストラクタ協会の主催で、インストラクタ育成コース（以下、育成コースと略す）と呼ばれるものだった。数ヶ月にわたって講義、指導研修、ダイバーへの指導実習があり、最後は協会本部から派遣された審査員による理論、ダイビング実技、指導法の試験というものだった。なにかによく似ていないだろうか？

育成コースで先生がわれわれに教えたことは、まさにわれわれがダンス受験生に何をやるべきかを授業したことそのものだった。そしてティーチャーとしてスタートした人が持つべき心構えも同じものだった。

わたしは育成コースでたくさんのことを学んだ。よき SCD ティーチャーとは、そしてよき SCD チューターとは、である。わたし自身の考えも加えてそういったあり方を述べてみたい。ただし、いまの SCD 指導やチューターのやり方をけなすものでないので、この点誤解しないでいただきたい。

指導はプラス思考で Positive Teaching

スキューバ・ダイビングは基本的に危険なものである。体を損ねたり、ことによると命を落とすこともある。けれども、ほとんどの教科書にそんなことは書かれていない。否定的な文言だからである。訓練体系は明快な考えで貫かれている。「安全優先でやれば、これほど楽しいことはない」である。育成コースの基本姿勢は、ダイビングとは大人のものであり、お金と時間がかかるもの、そして楽しくなければいつ止めてもいい、というものだった。

逆に、スコティッシュ・カントリー・ダンシングに命にかかわる危険はない。なのに、教えられるのは「間違えると大変なことになる、きちんとやれ！」である。率直に言ってこれはネガティブ・ティーチングである。そのような指導をしているのに、かれはどうして踊りをやめてしまったのかと、原因を他のせいにしてしている。これは英国の学校におけるやり方と、「先生は生徒の味方」を基本にしたやり方（たとえば、米国）の差にある、というのが何人かの結論だった。わたしはポジティブであれ、楽しみをふやせ、そして間違いに対して腹を立てるな、と言いたい。

ダイビングの訓練で、われわれはまずデモンストレート（水中でも陸でも）せよと教えられ、それを何回も繰り返せと言われた。ダンス・クラスと同じである！つぎに、口にすべき言葉を教えられた。「やったね！とくにきみの○○○○はいい。○○○○をやればもっとよくなるよ」。これを自分の

流儀で口にできるまでやらされた。わたしは助言を発する前に、なにか持ち上げるものを必ず見出さなければならなかった。みなさんもつぎの SCD クラスでこれをやってほしいし、反応を見てほしい。

技能のデモンストレート Demonstrating Skills

育成コースで、われわれは生徒らに何かをやらせる前に、それをみずからデモンストレートしなければならなかった。生徒がそれをはっきり理解したかどうか、5段階で指導能力を評価された。

1. かるうじてというレベル。
2. まあまあの出来。
3. 資格あり。

(以下が重要である)

4. ゆっくりだったが、よく出来た。生徒はそれを容易に習得できる。
5. レベル4に加え、とてもシンプルにやった。レベル4と5がインストラクタの持つべきレベルである。

スキューバ技能には20の基本項目があり、うち3つは完全にマスターしなければならず、ぜんぶで項目数68の課題がある。受験生間のライバル意識によって、ほぼ3分の1の受験生がレベル4ないし5を取った。わたしの成績はレベル4が3分の1、レベル5が3分の2で、審査員の前でやったインストラクタ試験では、無作為に指定された4項目の技能すべてで5をとった。

SCD のティーチャー訓練では“3”を目標にフットワークとダンシングを勉強し、“2”が2つ3つあってもよいとなっている。以前からきびしく言われているように、要点はダンサーに技能をデモンストレートすることであり、ダンサーを踊らせることが出来たかどうかにはほとんどが集中している。20項目の基本技能といったものはなく、あるのは5つのステップとフォーメーションのちょっとしたリストである。受験生がどんなふうに行ったか、受験生にそれを伝える明快な仕組みはないし、受験生同士が評価しあう場合、もしくは鏡の前で自習する場合の規範がない。そういう規範があれば、ふだんのクラスにいくらか厳しさを生み出すにしても、ティーチャー訓練クラスには大いに効果があると思われる。

スキューバの技能習得コースは自然な順序になっていて、難易度の低いものから難しいものに移るというわけである。

SCD ではどうだろうか？われわれは踊り方を述べ、試し、そして踊る。たとえば、poussette を教える前に pas de basque を指導する。しかしほとんどのティーチャーは、どれが基本技能でどれが応用技能であるかが分かっているのだろうか？そういったことはあとから分かってくるのである。われわれはフットワークが最初で、フロア上でどう動き回るかはそのあとと考えている。これ

は、体はよく動くが、場所・空間を認識するのが苦手(女性?)という人に対するやり方で、その逆の人(男性?)にはどうすればいいのだろうか。

スキューバ・コースでわれわれは生徒に技能をデモンストレートし、ついで生徒にそれをやってもらう。OK なら、つぎの生徒である。できない場合は、できるまで教えることになる。短時間に修正困難なときは、そのダイビング教室のインストラクタ補佐にその人物をまかせ、インストラクタはつぎに進む。インストラクタ補佐というのは正式の資格で、試験に合格した人である。SCD の予備試験合格者に似ている。これについては後述する。

SCD では、デモンストレートし(たぶん十分ではない)、踊らせ、クラス全体に「ダメな人がいる」と言って、中に重罪人のいることを気づかせ、そして魔法のごとく修正する。

ダイビングでできない生徒がいれば、たとえば水面でマスクを外させるが、「もういっぺんやってみて」とは言わない。正しいやり方の基本要素を言うか、もしくはデモンストレートする。目標を与えるのではなく、生徒が必要としていること(動作)を、語るか見せるのである。ゴルフでも、プロは「ボールをもっと遠く、ストレートに飛ばせ」とは言わない。「バック・スウィングをもっと大きく、ヘッド・ダウンをキープして」である。SCD でわれわれは「フレージングをうまくやってよ!」と言うが、これは「ここは小さいステップでやれば、早すぎずにそこに行ける」と言い替えるなければならない。

育成のカリキュラム Instructional Syllabus

スキューバの指導順序は整然としており、教科書は自由度のほとんどない、強制的なものとなっている。技能の習得で、インストラクタの裁量にまかされる事項はない。生徒のレベルに応じて、きちんとした技能の組み合わせがあり、わたしはそれをデモンストレートしなければならないし、生徒は十分にそれを表現できなければならない。

もうひとつ、“ダイブ・フレキシブル・スキル”というものがあり、わたしはどんなダイビング教室でもこれを随時提供している。これは指導順序にかかわらず行なうものである。こうしてわたしはダイビング教室を意のままに動かすことができ、生徒を楽しませながら講習を進めて行く。教室が他のインストラクタに引き継がれた場合、もしくは生徒が他のクラスに移った場合でも、生徒はちゃんと対応でき、これが強制的なカリキュラムの大きな利点である。

SCD のベーシック・クラスで同様な強制があったとしたら、クラスはより効率的になり、短時間内に技能向上が可能となり、われわれは個々の生徒に的確に注意を向けられ、生徒はつぎの段階に進むには、どのような技能習得が必要かが分かる

だろう。

インストラクタ補佐 Assistant Instructors

スキューバでプロのランクは3つのレベルから成っている。ダイブマスタ Divemaster は3番目のランクで、インストラクタのもとで見習い中のプロである。レベル4が多く、レベル5が数項目という成績で、ダイバー初心者でなく、もう少し上の資格を持つダイバーとなら一緒に潜ることができる。上のランクにいるのがインストラクタ Instructors で、いろいろなレベルがある。インストラクタはダイビング初心者の扱いに習熟しており、さらにダイバーの注文に応じてさまざまな特別ダイビングを提供できる。これら2つの間にあるのがインストラクタ補佐 Assistant Instructors である。インストラクタとしての訓練は終わっているが、本部審査員の巡回がないためインストラクタ試験未了という段階である。インストラクタ補佐は、ダイブマスタの仕事はすべてでき、インストラクタの一部の仕事もできる。

ほとんどのダイビング教室はインストラクタ1人、ダイブマスタもしくはインストラクタ補佐によるヘルパー1人という構成である。インストラクタがデモンストレートし、生徒がその技能を十分に発揮できない場合、ヘルパーは生徒の技能向上を手伝う。ダイブマスタ、インストラクタ補佐はインストラクタを目指しているが、1人のインストラクタに師事するのは一講習期間だけで、それが終わると別の経験あるインストラクタのもとで修行をつんでゆく。

SCD でもほとんど同じことが行なわれているが、ただひとつ大きな違いがある。“予備試験合格者”はダイブマスタとインストラクタ補佐が合わさったような存在で、かれら、かの女らはたくさんトレーニングを経ているが、すべてではない。いまの試験制度は、予備試験ではダンシング技能の完成度を求め、フル資格試験では指導方法の良し悪しに集中している。大きな違いとは、スキューバでは、インストラクタはその地域でダイブマスタを訓練し、資格を与えることができ、上級インストラクタ(インストラクタ中の上位者)はインストラクタ補佐の訓練、資格授与ができることである。最上級インストラクタは、インストラクタの訓練はできるが、資格を与えることはできない。前述したようにこれは本部審査員による巡回試験によって行なわれる。

これを SCD の世界にあてはめてはどうだろうか? 受験生クラスのチューターは、“指導補佐”が持つべきスタンダードに対してトレーニングおよび資格授与ができるであろう。指導補佐というのはフル資格レベルのダンサーなのだが、試験未了の人である。指導補佐は pas de basque の上達にたずさわりの、あるいは姿勢や腕についてダン

サーに助言できる。けれども、ダンサーにつきの資格を与えることはできない - 『ジョン・ドルーリ作のダンスができる』あるいは『週末の経験者向きのダンス会に行ってもいい』。多くの人を指導に関与させることができ、正式の試験の場においてストレスを減らすことができる、これがこの仕組みの利点である。機会がめぐってきたとき、かれらはしっかりと本部審査員の前に立てるだろう。もうひとつの利点は、審査員の責務が、ティーチャー準備の最終段階を審査するだけに絞られることである。受験生はその場にいるティーチャー、チューターの初期の姿を映していることになる。

以上について多くの異論があろうが、要点は現ティーチャー（再講習を要するかもしれないが）に、「この人はティーチャー初期段階にある」という資格付与責任を与えることである。本部は最終段階のみに焦点を絞ればよい。もっと単純に言えば、「受験生クラスのチューターは予備試験の合否判定と、フル資格へのトレーニングができ、本部はフル資格の合否判定のみを行なう」のである。

ある特定のクラスに生徒がやってくるわけはなにか？よく言われ、かつ異論のない理由は、

- 1) 場所と時間
 - 2) ホールがよい、とくに床がよい
 - 3) 音楽の質がよい（よいほうから述べると、ライブ音楽、CDと良質のサウンド・システム、テープとちやちなプレーヤー、古いレコード、の順になる）である。
- 小さな声で言われるものに、
- 4) ティーチャーの知識、経験、心構え、熱心度が大きいかどうか、そして
 - 5) そのクラスの態度（その風土、つまり新ダンサーに温かいか、それとも強迫観念を与えるか）がある。

(4)と(5)は手ごわい事項である。ほとんどのグループでティーチャーを替えることはできないし、風土の変更も困難、時間を要し、成功した例はごく少ない。われわれすべてが、クラスにおいて刺激、挑戦、激励、楽しさという指導を経験しているが、それらがまだまだ足りないのである。あなたが毎週クラスに通う理由はなんだろうか？もしも(5)のクラスしかなかったとしたら、それでも行くだろうか？人を引きつけるには上記5項目の調整を要するが、それがなされなければ、われわれのSCDコミュニティは先細りになってしまう。どの項目もわれわれに課せられた命題であるが、どのように変革してゆくか、われわれの内部を見つめることが必要である。

基本構造の見直し Rethinking our fundamental structures

スキューバにおいて、よきダイバーとなるためにダイビング教室に入るが、主眼は潜ることである。

トレーニングとダイビングは別物である。SCDではダンシングの社交性を保ちながら、クラスにおいて勉強と指導とをごちゃ混ぜにしている。そしてときにはソシヤルだけのイベントがある。

生徒が行けない場所、時間でクラスを設けるようなダイブ・センターは廃業するしかない。汚くて不健康なプールにはだれも行こうとしない。うまく行っているダイブ・センターはすべて前述の(1)と(2)を融合させていて、わずかの優位差を売り物にしている。アンケートによれば、生徒はインストラクターとの人間関係をもとにダイブ・センターを選んでいる。生徒とインストラクターとの融合がなく、インストラクターの姿勢、やり方に好感が持てなければ、生徒はほかに移って行く。SCDも同じ？

わたしがスキューバから学んだ最大のこと、ダンシング・コミュニティで正に考えるべきことは、ダイブ・センターが提唱している三つの“E”、Education 教育（初期および継続）、Equipment 設備、そして Entertainment 娯楽（旅行、スキューバ・クラブおよび他の親睦行事を含む）である。人は Entertainment を目的にダイバーになり、ダイブ・センターは Equipment を目玉にして営業を続け、そして Education はその仕組みの中に新ダイバーを取り込むことを目的にしている。三つの構成部分はそれぞれ明確な役割を持ち、ダイブ・センターの方針決定に大きな力を持っている。

もちろんグループに入らず、自己研鑽を続けて楽しみを見出す人もいる。その人たちはスキューバ教室にずっと通いながら、魚の種類を確かめたり、水中写真を撮る目的でダイビング資格カードを収集している。かれらの楽しみは、潜るのと同等以上に、勉強することにある。

SCDにおいて、われわれは Education と Entertainment を溶け込ませており、そのため楽しむことを主眼にしている人は、いつも Education につき合わされている。かれらがそう望んでいるかどうかにはおかまいなく、である。グループによっては、ときどきこの二つを分けている。たとえば前半はクラス、後半はソシヤル・ダンシングのやり方である。

しかしながら、もしもわれわれがスキューバ方式をとるならば、つぎのようになる。

- 1) ベーシック・クラス。習得技能リストがあり、それを体得したら卒業。クラスは一定期間、頻繁に開催される。
- 2) 各方面に分かれた継続的な選択クラス。各方面とは、デモンストレーション、トリッキーダンス、上級テクニックをいう。それぞれに習得技能リストがあり、それを体得したら卒業。
- 3) たくさんのソシヤル・ダンシング（クラスではない）。習得技能が発揮できる毎週・毎月のダンス会、および旅行やダンス・バカンスを含

む7 - 10 日間の遠征。

いままでとの違いはなにか？この仕組みの主眼は Entertainment にある。しかもすべての Education 活動は大勢の人を SCD に取り入れることになり、Entertainment をかねて難しいダンスを踊りたい人、新たな挑戦を欲する人にそのような場所を提供することになる。みなさんの技能がレベルに達しない限り、みなさんは金曜夜の上級者向けダンス会に参加しようと思わなくなる。より重要なのは、これによって楽しみとしてのダンシングに期待が高まり、各クラスに参加してそこを卒業しようとする人たちがクラス自体が発展し続けるということである。コミュニティは大人数の合宿を開くことになるかも知れない。なぜなら合宿はまさしく特別な楽しみのある場であるためである。SCD を Entertainment に戻すのはいまである。

ひとつの教室を終えたらまたつぎの教室というように、継続して習熟を続けるダイバーが多い。同様に、能力を常に試しているダンサーたちがいる。何人ものティーチャーから指導をうけたいと願っており、それが上達につながっている。これは正解である。ダンサー人口の4分の1以上はこれらの人、とわたしは思う。クラスにおいてその人たちに向けて常に挑戦がなされ、新たなダンスおよびフィードバックが提供されているなら、各クラスとダンシングはうまく調和している、とい

える。だが、われわれのオール・イン・ワン、ごちゃ混ぜクラスは、そのようになっていないのである。

われわれのクラスには、学習心・向上意欲を持つダンサーが4分の1いる。それに合うダンスをやると、向上などに関心のない人には、「なんでこんなことばかりやるんだ」ということになる。リーダーはクラス員のドロップ・アウト（退会）に気を重くしていないだろうか？

わたしは最近、ある地域（数クラスあり）のダンサー連中との雑談で、こんなクラスの話聞いた。そのクラスは楽しむことだけをやっており、フットワークとテクニックについては何もなし、でもソシャルと楽しさは十分とのことだった。クラスは拡大、発展中という。そのクラスの教人は向上を目指し、テクニックを主眼とする別のクラスにも行っている。だれもが向上意欲を持っているわけではないし、また意欲を持つ人にはその場があるという、この組み合わせはいいと思う。

SCD コミュニティは、世界的に先細りの状態にある。活動をどのように進めて行くか、目的は何か、われわれは真剣に考えなければならない。他のレジャーの例はわれわれの参考となろう。SCD 以外のみなさんの活動から、どんな回答が引き出せるだろうか？

（“Scottish Country Dancing: Fun or Life -Threatening?” by Melbourne G. Briscoe, from TACTalk, Volume 28, No.1, Jun 2003） ■

予備試験コース体験記

（ケン春日）

私どもの住んでいるフランス、アンジェに、パリ・ブランチの要請もあってダンス・グループを作ることになった。声をかけたら8カップルほどが集まった。ワルツやタンゴを踊りまくっている連中なので、音楽に乗るのは上手である。問題はスコティッシュ・ダンスの特異性である。音楽もステップもまるで違うので、さてこのビギナーたちにどのように教えたものか、そこで予備試験受験を思いついた。わが連れ合いと、サマースクール 2004 の後半のコースに参加することにした。

チューターは若手のアンドルー・マッコーネル、ピアノはベテランのケン・マートルで、生徒は

イングランド……1	スコットランド……1
ドイツ……1	スイス……1
イタリア……1	ポルトガル……1
フランス……1	カナダ……2
南アフリカ……1	日本……2

の12名。みな若く、私たちのような年寄りを見て驚いている。

初日、どこかで見た顔だと思ったらフランス・ブルターニュの男、クリスチャン(40歳)だった。これがまるで英語がわからない。おまけにアンドルーが「さあ、マニュアルを開いて」と言ったら、肝心の教科書をひとつも持っていない。「それなに？ どこで買えるの？」という具合である。一同唾然として開いた口がふさがらない。さすがのアンドルーも「すぐ売店へ行って買ってきなさい！」と悲鳴に近い声を出す。

フランス人ときたらこれだから嫌がられる。私たちも同類に見られて赤くなる。クリスチャンは髪の毛を束ねて小さなチョンマゲにし、ガムをくちやくちややっている。こりゃ英国人にもっとも嫌われるタイプだよ。こちらとは知った仲なので何かと頼られる。まわりは、ケンもノコも同じ仲間だなど白い目で見ている。いやはやである。

ほかの外国人は留学や勉強経験豊富で、英語には自信がある様子だが、クリスチャンが指導練習するとき、単語の間にアーとかウーとかドンクとか、フランス語のつぶやきが入る。Hは発音しないので、手はアンドになる。みないらいらして貧乏ゆすりが出てくる。

ストラスペイ・セッティングではサード・ポジションが前になったり後ろになったり、一定しない。まじめなアンドルーがそのたびに「後ろ！後

ろ！」と大声を出す。こんなことは
適当でいいと思っていたらしい。つ
まりかれにとってこれは些細なこと、
どちらでもいいじゃないの、なんで
こだわるの、である。これはふつう
のフランスのダンサー全般にいえる。
だからフランス人の受験生は敬遠さ
れるのだろう。上手くもないのに偉
そうにすぐ腰に手をやる。「手は！」
とアンドルーが叫ぶ。

ネイティブ・スピーカーはもち論、
英語に自信のある人は言葉で踊りを
指導しようとする。アンドルーが
「ステップ5分、フォーメーション
10分、セットにしてダンス5分、合計20分くら
いで収めるように。常に時間配分を考えて」と言
っているのに、どうしてもペラペラしゃべってしま
う。緊張するとますますしゃべる。不安なのだ
ろう。ピアニストは眠そうに手をポケットに入れて
いる。アンドルーが、自分でデモして躍らせろ、
音楽をもっと使えと言っているのに、「自分のと
ころのグループはよく説明しないと理解してく
れない」とか文句を言う。この場は地元のクラスの
指導練習ではないのだ。そのあたりの頭の切り
替えができていない。地元のグループに指導して
いる、と考えるのが混乱の元である。

ガムをくちやくちやくやりながらニタニタして
いたクリスチャンも、数日経つにつれて顔が引き
締まってきた。こりゃ大変だとわかってきたのだ
ろう。

余談になるが、私たちのような年寄りが受講す
る場合、これは体力、体調との勝負でもある。受
験当日に最高のコンディションにもっていきよ
う、最初からあまり飛ばさないことが肝要である。
チューターにいいところを披露しても何にもな
らない。ひざ、足を十分にかばって大事にしたい。

宿題は山ほど出た。アンドルーの対応は誠実で、
返された答案には赤ペンでびっしり書き込みが
あり、スペルもきっちり修正してくるのでぞんざ
いな解答はできない。解答は英語で書くわけだか
ら、ステップやフォーメーションの名前は日頃か
ら正確に書けるようにしておくのとあとで役に立
つ。

受講中、判らないことははっきりと判らないと
言ったほうがよい。遠慮していると、この人本当
に判っているのだろうか、とチューターに不安を
与えることになる。RSCDS ははるばる受講に來
てくれた人をなんとか合格させようとしている
のだから、しっかり理解できるまで何度でも教え
てもらえばよい。ネイティブ・スピーカーではな
いのだから、何度聞き返しても恥ずかしいこと
ではない。その国の文化や歴史、習慣、ものの考え



最後列左からケン、アンドルー、クリスチャン

方などがわからなければ完全には理解できない
のが語学である。

ピアノのケン・マートルが親切にも土曜日の
午後、課題ダンスをぜんぶ弾いてやるから受験態
勢で練習しろ、ということになった。リカップは
生徒12人で担当するが、ダンサーが4人足りない。
次期チェアマンのスチュアート・アダム以下、
ソサエティの殿上人4、5人がこころよく付き合
ってくれた。かれらはボランティア精神に長け、
労を惜しまない。頭が下がる。

クリスチャンのくちやくちやくもニタニタもな
くなった。結構いい顔しているが、ぼやきは依然
として続いている。「こんなにきついとは思わな
かった。高い金払って監獄に入っているようなも
んだ。これじゃバカンスなんかじゃない、どう思
うケン?」。私たちはフランス人をよく知っている
ので、これがフランス人氣質と思うが、日本人、
英国人、ドイツ人がこれを聞いたら「こいつ、何
で受験に來たんだろう。一生懸命勉強するのがあ
たりまえだ、いやなら來るな」である。

私たちのエギザミナーはスタンリー・ウィルキ
ーとジョン・マクリーン。ジョンとは不思議
に縁がある。最初のサマースクールのクラス・テ
ィーチャーでギュウギュウ絞られた。つぎに私た
ち最初のグラン・バル、パリ・ブランチのルーア
ン・ウィークエンドのティーチャー、そして今回
のエギザミナーというわけだ。相性がよくない、
けむたい人とは煙が晴れるまで付き合いと、神様
もしつこく、粋な計らいをなさる。

筆記試験の立会人はアレスター・スミス、副校
長アン・スミスの夫君である。じつはスコットラ
ンド出発の直前、試験時に翻訳者が必要か、との
本部問合わせがあった。せつかくの親切な問いか
けをむげに断るのもまずいし、すこしはましなフ
ランス語で解答すると小癩な小蛙めと思われて
はもっと困るので、熟慮の結果、ご配慮ありがた

くちょうだいし、日本語で受験しますと回答した。筆記試験当日、答案用紙にまず“今回すべて英語で受講したので、英語で解答する”と書き、解答に取り組んだ。他の受験生は、クリスチャンのみフランス語で、かれ以外は英語で解答した。私は最後の問題をなんとか書き終えたところで時間切れとなり、もう一度見直す余裕がなかった。

ノコは、試験立会人の「あと 10 分」のアナウンスのとき、やっと最後の質問にたどり着き、時間不足のためあせって日本語で書き出したが頭がぐるぐる回ってしまった、途中から英語に戻ったりしてわけのわからない文章を書きながってしまった、恥ずかしいかぎり、とあとで言っていた。英語圏外の人には 15 分ほど余分に時間をくれるとよい。みな時間が足りなかったとの感想である。

ダンシング実技試験にのぞむ。エギザミナーはお年人が多い。目がかすんでいる人もいるので、しつこく、しっかりした動き、ときにはオーバーな動作も必要である。耳も遠い方がおられるので、声は張り上げる、上品なことをやっていたのでは見逃される。以上はある人からのヒントである。

リール、ジグでは目配せ、手さばきなどはどうでもよい。足さばきに全神経を集中する。エギザミナーは受験生の足元しか見ていない。ゆったりしたストラスパイでは大げさにフレージングやチームワークに気を配る。受験生がへまをやりそうところは、ほかはあくびをしても、三重丸をつけてしっかり見ている。トランジションの箇所は要注意である。

さてティーチング試験となった。たった 20 分間でステップを教えて、フォーメイションを教えて、セットにしてダンスさせるのはかなり骨が折れる。エギザミナーは受験生の指導のやり方を見ている。言うべきこと、示すべきことがしっかりわかっているか、デモすべきところでデモしているか。Watch Me、デモは自分の持てる最高の演技をすること。これがしっかりできれば、ダンシングのへまをかなり挽回できる。ボランティアの生徒が理解できたか、向上したかはあまり関係がないと見てよい。自分の指導ぶりが採点されているのである。

チューターやエギザミナーから比較級でベターとかマッチベターとか言われたら、以前のてくぼうよりもすこしはましになったと考える。ほんとうに上手な生徒には、ベリグッドなのである。イントネーションでもほめられているのか、社交辞令か判断できる。先生は比較級を使ってへたくそをほめる。先生やエギザミナーがグッドとか、サンキュと言ったら、それは「はい、ありがとう」くらいだと思ふこと。

観察されているばかりではしゃくなので、エギザミナーのほうもちらりと見てみよう。しっかりこちらを見ていれば合格、2人でひたいを寄せてヒソヒソ話していたら不合格である。受験生が一

生懸命演技しているのに、エギザミナー同士が話しはじめたら、これはもうろくなことを言われていない。「かれは何を指導したいのかねえ、わかる?」。上手な受験者に対しては、どこかでへまをやらないかと、しっかりこちらを見ている。

今回はどのようにビギナーを指導したらよいか、ほんとうに勉強になった。アンジェの仲間と楽しく踊れそうだ。チューターのアンドルーは前もってよく準備して、生徒の技量向上につくしてくれた。誠実温厚そのものといった人である。ケン・マートルはティーチングのひよこたちによく我慢して、朝から晩まで付き合ってくれた。私だったら、途中で放り投げてしまっただろう。生徒はみなアンドルーの教えを忘れず、国に帰ってスコティッシュ・ダンシング発展のために努力することと思う■

キルトの下には何が (スティーブン・ウェブ、ロンドン・ブランチ)

最近発表されたある有名ウイスキー・メーカーの調査結果によると、ほとんどのスコッツメンはキルトの下になにもはいていないという。69%の男性が「突撃!」を好んでいるというのだ。しかしこの数字は、キルトを着てゆく場所がどこかによって大きく変わっている。結婚式ではそれが流行しており、他方ラグビーを観戦するときは下に何かをはいてゆくという。ダンサーに関しては言及がない。

ダンサーのわたしにはずっと昔からの関心事だった。1977年のセント・アンドルーズで「男のドレスはどうあるべきか」の話聞いたのはとてもよかった。表敬される男性はみずからを律しているとか、軍隊における着用方法を話してくれたのは、当時チェアマンのダンカン・マクラウドだった。かれはすべてを語ってくれた。

それから何年も経ったあるとき、ブランチのダンス会に出ようと歩いていたら、ハロッズの前で日本人旅行者に道をふさがれ、呼び止められた。ロンドンのあらゆる観光スポットを熱心にめぐり、そしてネッシーに次ぐスコットランド第2の秘密に迫りたいというおばさんたちだった。

「キルトの下には何もはいてないの?」。あけすけな問いに、わたしも同様に答えた。

「何も。規則でちゃんときめられているんだ」。

この答えにおばさん連中は納得できなかったようで、キルトに手を伸ばしかけた。わたしはこう言って謝った。

「いま急いでいるし、この寒さじゃそいつが風邪をひくかもしれないんで」。

(“The naked truth” by Stephen Webb, from The Reel No.249, Sep - Dec 2004, by the courtesy of the RSCDS London) ■

新 CD 紹介 (Tom Toriyama)

(1) Music for Book 44 Dances (RSCDSCD046) by Robert Whitehead & The Danelaw Band

(ダンス内容略)

(2) Music for Book 38 Dances (RSCDSCD044) by The Muriel Johnstone Quartet

(ダンス内容略)

(3) Dance through the Miscellanies Volume 3 (RSCDSCD045) by Muriel Johnstone's Band

Lady Dumfries (8x32R), Edinburgh Jig (8x32J), Abernethy Lassies (8x32R), Gramachie (8x32S),
Shoulder to Shoulder (8x40J), Duke of Roxburgh's Reel (8x32R), Lass o' Loudon (8x32S),
The Merry Oddfellows (8x32J), The Highlandman kissed his Mother (8x32R), Rosner Abbey (8x40J)

(4) Delaware Valley Live (SSCD15) by Muriel Johnstone & Keith Smith

Da Rain Dancing (8x32R), Strathglass House (8x32S), Lamb Skinet (8x32J), Catch the Wind (8x32R),
The Gentleman (8x32S), Hooper's Jig (8x32J), Burns Hornpipe (4x32R), The Lea Rig (8x32S),
Miss Allie Anderson (8x32J), Balmoral Stratspey (4x32S), Follow Me Home (8x32J), Mrs MacPherson
of Inveran (8x32R)

(5) Dancing Forth Too (EBCD002) by Doreen McKerron, Pete Clark, Anne Evans & Wendy Weatherby

Dancing Forth (8x32R), Castle Wynd (8x32S), Eilidh Maclain (8x40J), St Margaret, Queen of Scotland
(4x32S), Corstorphine Fair (4x40J), Rose of Glamis (32S+32R-32S-32R), Brian's Bairns (4x32R),
The Queen's Jubilee (4x32S), The Honeycomb (4x40R), Breezbay (4x32J), Edina's Pride (8x32S),
That Sinking Feeling (4x32R), Have a Bashie (4x32J), Melville Castle (8x32R), Strictly Scottish (6x48R)
(すべてダンス説明書つき)

(6) First Stop! (WAVCD001) by Waverley Station

8x32 Reels, 8x32 Jigs, 4x32 Strathspeys, 8x32 Jigs, 8x32 Strathspeys, 8x40 Reels, 3x32 Waltzes,
8x32 Reels, 8x32 Strathspeys, 4x64 Jigs, 8x32 Reels, 2.5x32 Waltzes

サマースクールで新 CD が発売されるため、ご紹介する CD が多くなる時期である。本年も例外ではない。

(1) はことし発表された Book 44 用の CD。ブランチレター No.62 の邦訳にあるとおり、ダンスの選考に各ブランチが関与したが、Book 44 はどれもこれも似たようなダンスばかり、という結果になってしまった。

ロバート・ホワイトヘッドのデーロー楽団の演奏は、水準を上回る堅実、軽快な音楽になっている。録音品質も良好である。

【注文略号: Book 44 CD ¥2,600】

(2) は古いテープの CD 化ではなく新録音である。

	旧録音	新録音
Piano	M. Johnstone	M. Johnstone
Accordion	M. Anderson	J. Lindsay
Fiddle	K. Smith	K. Smith
Drums	G. Smith	G. Smith
Flute	A. Young	なし
Bass	R. Currie	なし

というように違いがあり、代替曲にもいくらかの相違がある。アコーディオンのジミー・リンジーは Book 28 音楽でリーダーをつとめている芸達者である。新録音は端正ですっきりした演奏。ただし、旧録音になじんだわたしには旧録音の豊饒で力強い演奏も捨てがたい。

【注文略号: Book 38 CD ¥2,600】

(3) は旧録音をそのまま CD 化したもの。既 Volume 2 まではミュリアル&ビル・ゾーブルのスコットスコア盤でリリースされていたが、この Volume 3 は RSCDS に販売権を移譲したようだ。CD 化にあたり、全演奏者から著作権再使用許諾を得る必要があり、スコットスコア社ではそれが困難だったためと推測される。Lady Dumfries, Lass o' Loudon に CD を使えるのはうれしい。

【注文略号: ミシレーニー3 CD ¥2,600】

(4) は 2003 年春、ミュリアル・ジョンストンとキース・スミスが米国ペンシルベニア州のデラウェア・バリー支部のホールで演奏したときのライブ録音である。ミュリアルはバックングのみで、メロディ・ラインはすべてキース“ザ・フィドル”スミスが演奏している。近年キースはますます円熟味を増し、官能性さえ感じられる。フィドルだけでダンサーは音楽に浸りきって踊れるが、そこにミュリアルのピアノである。どの演奏もすばらしい、の一言につきる。

会場の雰囲気はキース自身のミキシングによって控えめな表現になっているけれども、熱狂は十分に伝わってくる。録音機材を一新したためか、従来のスコットスコア社録音とは思えないほど元気で繊細な音になっている。

【注文略号: デラウェア・バリー CD ¥2,600】

新刊紹介

1997年春に来日したエジンバラ支部デモ・チームは、公演に加えてわれわれに CD “Dancing Forth” をもたらししてくれたが、(5) はその2作目である。前作と同じように安室喜美子さんが制作を援助し、また全ダンス説明書付きとなっている。前作はドルーリのダンス集だったが、これはかれ以外のダンスも含んでいる。ピアノのドリーン・マッケロンはエジンバラ支部にこの人ありという名手、フィドルのピート・クラークはリスニング CD を何枚も出している実力者、フルートのアン・エバンズ、チェロのウェンディ・ウエザビーもプロの音楽家である。

たいへん興味深い CD である。4人が4人ともわれこそは、の意気で演奏しており、もうすこし融合を凶ってくれるとリスナーも心安らかになれる。ただしクラスやダンス会の会場では、音は元気で出てりゃいい、の人が多いのでこの演奏はそういう場に合っている。ドルーリの Breezby は 1998 年の来日時、尾田久男さん（横浜グループ）のもてなしに対するお礼ともいえるダンス。

〔注文略号：ダンシング・フォース CD ¥2,800〕

「ウェイバリー駅」という一風変わった楽団名の CD が(6)、アルバム名も「最初の停車駅」。中身はしごくまっとうである。「モア・メモリーズ CD」の中核メンバー、ピアノのリズ・ドナルドソン、フィドルのデビッド・ナイトを中心とする楽団で、今回はラルフ・ゴードンのチェロもしくはフィンガリング・ベースが入ったトリオである。第2トラックのジグ、第4トラックのリールで明らかのように持分をわきまえたアンサンブルである。第5トラックはエアで、ストラスペイ作編曲の名手はミュリアル以外にもいるぞ、と思わせる。第6・第8トラックはアメリカン・スタイルが楽しめる。CD はロバート・マッキントッシュ、ウィリアム・マーシャルの曲も収録していて、ぜんぶがアメリカ式ではない。

リール、ジグはゆったりした演奏でステップ練習に活用できる。ワルツの演奏時間は短いので使うとすればクールダウン。第9トラックのストラペイはリズの考えがきちんと表われた演奏である。

〔注文略号：ウェイバリー CD ¥2,600〕

上記の商品のご注文は
郵便振替 00240-0- 63517 東京ランチ
締切り 10月22日(金)
(価格は送料込み)
お渡し予定 11月下旬 担当 トム鳥山

ひとところよりも円安傾向で、取得円価が高くなっているため、次号ランチレターで CD をご紹介する場合、見直し価格となることがあります■

「スコットランド 歴史を歩く」高橋哲雄著

スコットランドは遙かな国である。われわれは普通の日本人よりもダンスを通じてスコットランドに親しんでいるが、浅い知識を持っているに過ぎない。同国の歴史を少しばかりかじると、各種の疑問、不思議が起こってくる。

たとえば、セント・アンドルーズ大聖堂はなぜあのような徹底的な廃墟となったのか、克蘭ゴとタータンがあるというのはウソという人がいるけれど、本当はどうなのか、イングランドとスコットランド両議会の合邦をスコットランドが認めたのはなぜか、スコットランド人はケチ、を広めたのはどこの民族か、などである。

本ではこれらについて明快に答えている。克蘭ゴとタータンがあるというのは伝説であり、18世紀前半の肖像画を見ると、一族中、それぞれのタータンはみな違う。伝説を広めたのは軍隊、ウォルター・スコット、ジョージ4世、ビクトリア女王、業界の商業主義であったという。

本はメアリ・スチュワートと宗教改革から書かれている。プリンス・チャーリーの反乱についての記述は少ないが、歴史の流れでは大石良雄の抵抗と同様、それくらいの位置づけなのだろう。

(岩波新書 No.895 ¥777)

「ミステリー&ファンタジーツアー スコットランド」 石井理恵子/杉本 優著

スコットランドの幽霊、妖精、魔女の話現地取材した本。超自然的な現象に深い興味を持っている人向きである。著者が実際にお化けに出会った話なら興味をそそるが、そのレポートはなく、一般人には「そんなものか」というところである。スペドリリング城の逸話は記されていない。

(新紀元社 ¥1,680)

以上の本は書店でお求めください（以前、本をランチに注文された方がいました）■

Book 44 のダイヤグラム

Book 44 を同封します。8月・9月の同講習会参加者にはダイヤグラムを差し上げました。参加できなかった会員から、ダイヤグラムがほしいとの声があり、つぎの要領にしたがって希望を寄せられた会員にお送りします。ダイヤグラムのサイズは A4 判です。

1. ダイヤグラム代金 1部 100円 (切手代用可)
2. 切手 80円 (定形外封筒は 120円) を貼り、受取人の住所・氏名を明記した封筒

上記2点をセクレタリ中田多鶴子あてお送りください。締切り：10月末日■

別の名前を持つ Book 44 ダンス

- インターネット・チャットから -

最近のインターネット上のチャット（おしゃべり）で Book 44 ダンスを話題にしており、まだもらっていないとか、サマースクールでは無料配布したとか、にぎやかである（9月上旬時点）。Book 44 の Crathes Castle, The Silver Strathspey, The Silver Thistle についてこんなトークがあった。

イアン・ボイド Iain Boyd—CD 未入手だったが、“Crathes Castle”をクラブで踊ろうと、インターネットで 3x48 のストラスペイを探した。デーモンロー楽団の CD、“Dancers’ Choice 2” に “One for the Millenium” があり、これで踊ろうということになった。CD には説明書が付いている。驚いたことに、“Crathes Castle” と “One for the Millenium” は同一作者による同一ダンスなのである。

その後、Book 44 CD が手に入ったのでさっそく “Crathes Castle” を聴いてみると、チューンがまるっきり違う。“Dancers’ Choice 2” ではトラディショナル・スタイルのストラスペイ、Book 44 CD ではバストラル（メロディックなストラスペイ）で演奏されている。どうなっているんだ、と思う。

ジョージ・ミーケル George Meikle—イアンは嘆いているが、異名同ダンスは “Crathes Castle” だけではない。モイラ・ステーシーのダンス “The Silver Strathspey” は、以前かの女が出した “Gigha Set” ブックでは “We Twa” の名前であった。チューンもオリジナルの “Mr & Mrs Keith Stacy” (by Patrick Stacy) から “Florence MacLean of Ardholm” (by Eric Allan) に変わっている。

同じように、“The Silver Thistle” はリーズ・ブランチの “Silver Collection” が初出であり、その音楽は “Jack’s Delight” であった。Book 44 では “May-day Hornpipe” になっている。

バンド/ミュージシャンの立場から言うと、1つのダンスにオリジナル・チューンが2つというのはたいへん困ることなのである。どちらを選んでも、ダンサーは「なんだ、違う曲をやっているじゃないか」と不満をもらすだろう。

トム鳥山注。—チューンの違いについては、著作権の存在を理解すべきだろう。Book 44 を CD とともに安価で、期日までに発行するには著作権案件を早めに解決する必要がある。著作権使用許諾料を求められたり、使用許諾に難色を示されると、著作権非適用の別の音楽をオリジナルに指定したほうが手っ取り早い。（ちなみに、著作権保護期間は日本の場合、著作者の死後 50 年）。

本部の目から見て、当初のオリジナル曲はダンス・イメージにそぐわないこともある。また、“Jack’s Delight” は “Dancing in the Street” の指定曲である■

International Weekend 東京ブランチ 20 周年記念

2005 年 1 月 28 日（金）—30 日（日）
鎌倉プリンスホテル（七里が浜）

ティーチャー アン・ディックス &
レイチェル・ウィルトン
ミュージシャン デビッド・ホール &
ジュディス・スミス

定員 100 名

参加費 ¥42,000

（くわしくは後日ご案内します）

グループ行事案内

日本スコットランド協会

第 22 回日本スコティッシュ・ハイランド・ゲームズ

10 月 17 日（日）10.30—4.30

上野学園草加キャンパス

（松原団地駅西口下車・送迎バスあり）

¥1,500 小学生以下無料

日本スコットランド協会 03-3473-1891

（月・水・金に連絡可）

荒川スコティッシュカントリーダンスクラブ

第 3 回パーティ

11 月 21 日（日）12.30—4.30

第九峽田（はけた）小学校

（地下鉄千代田線町屋駅 3 分）¥600

竹本光雄 Fax 03-3898-2484

赤羽 S.C.D.C.

第 15 回 Autumn End Ball

11 月 21 日（日）11—4.00

赤羽会館 4F（赤羽駅南口 3 分）¥1,500

連絡先 真庭成子 03-3907-9357

TS スコティッシュ・カントリー・ダンサーズ

Annual/New Year Dance 2005

1 月 15 日（土）1—4.30

武蔵野市 SWING/北 2F

（武蔵境駅北口 1 分）¥1,000

連絡先 トム鳥山 044-988-7773

次号は 1 月発行予定。2 月-4 月のお知らせを